都道府県別賞一等

突然、身近に迫ったガン

宮崎県　鵬翔中学校　二学年

池田　虎吉

今年の三月、僕の叔父が肺ガンで亡くなりました。具合が悪くなり病院で診察を受けたところ、肺ガンが発見されました。しかし、その時には既にステージ４で、治療の選択肢はほとんどありませんでした。それからの出来事はあっという間で、僕たちは叔父を失いました。

叔父は僕をとてもかわいがってくれていました。彼の笑顔、彼の声、彼の優しさ、すべてが今でも僕の心に鮮明に残っています。その悲しみは今も続いています。

ちょうどその頃、学校の家庭科の授業で生活習慣病やガンについて学んでいました。それまで、これらの病気や死は遠い存在のように感じていました。しかし、叔父が亡くなったことで、これらの問題が実際に自分の身近に起こりうることを痛感しました。それは怖く、同時に深い悲しみを感じました。

叔父が亡くなった後、僕たちは彼の生命保険の存在を知りました。それは、彼が亡くなった後も、従弟たち家族を思いやり、守ろうとした彼の愛の証でした。その保険金は、彼がいなくなった後の従弟たちの生活を支え、新たな生活を始めるための一助となりました。

また、叔父の死は、僕たちに「癒し」の大切さを教えてくれました。悲しみは時間と共に少しずつ薄れていきますが、完全に消えることはありません。しかし、その悲しみを受け入れ、前に進むことで、僕たちは新たな人生を歩み始めることができました。それは、叔父が僕たちに残してくれた最後の教訓でした。

叔父の死とその後の経験は、僕たちに生命保険の重要性を教えてくれました。それは、自分自身と家族を守るための「生活の保険」であり、未来への投資です。そして、それはまた、僕たちが叔父を思い出し、彼の愛を感じるための「心の保険」でもあります。

これからも、僕は叔父の教えを胸に、自分自身の人生を守り続けていきます。そして、僕自身が家族を持った時には、叔父が僕たちに示してくれたように、家族を思いやり、守るための「生活の保険」を持つことを忘れません。